

『 On-line みんなで法華経を学ぼう！ 』

vol. 1 Apr.2022

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『はしがき・はじめに・法華三部経の構成』

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜

せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習学せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこ

とを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)



「新釈法華三部経」発刊に向けての願い、主眼

◎ 教えを日常生活にいかに実践すべきかを主眼に置いた (P4・終4行/P2・5行)
法華三部経の真精神を学ぶため

〈義に依って語に依らざれ〉 (P6・3行/P3・5行)

◎〈宗教の本義〉を明らかにしたい (P7・3行/P4・2行)

あらゆる宗教に含まれているはずの共通の真理。
人類すべてが進めるような「融和と協調」の場をつくらなければならない。
— 〈宗教の本義〉をきわめ、その実践を最大の目的としてまとめた。

- 信仰の進んだ高弟たちを主な対象として、「人間の生き方の究極の境地」をお示しになったもの。 (P8・6行/P4・終2行)
- その十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえるのではないのでしょうか。 (P8・8行/P5・1行)
- 法華三部経は、あくまでも「実践と努力」の教え。 (P8・終行/P5・4行)

《思惟のひととき ①》

私の信仰姿勢は、果たして・・・ —

- ①「教えをいかに実践するか」を、つとめていただろうか？
 - ②「融和と協調」する自分づくりに、つとめていただろうか？
- 振り返ってみましょう。

ほけきょう いっさいきょう せいずい 法華経は一切経の精髓

(P24・5行/P14・1行)

— あらゆるお経の大切なところ、即ちお釈迦さまの教えの精髓がまとめられている。

- ① 宇宙の本当の相(すがた)はどうであるか？
- ② 人間とはどんなものか？
- ③ 人間はどう生きねばならないか？
- ④ 人間と人間との関係はどうあらねばならないか？

仏はいつもいる すべての人に仏性あり (P24・終2行/P14・6行)

- ① 仏はいつもそばにいて、われわれを導いてくださる。
- ② すべての人に仏性あり、
- ③ だれでも努力次第で仏の境地に達せられること。

ぶつきょう いちぶつじょう 仏教はただ一仏乗！

(P35・終3行/P21・終6行)

- ただ一筋しかない仏の教えの大道に目を向けさせようという、やむにやまれぬ熱意から書かれたのが、ほかならぬ《妙法蓮華経》だったので。

中国に理の花開く

(P37・2行/P22・終5行)

くまらじゅう ほんやく
鳩摩羅什の翻訳

(P39・5行/P24・2行)

○『^{ぶつにちにし}佛日西に入りて、^い遺^{いよう}耀^まさに^{およ}東に及ばんとす。この^{きょうてん}經典は東北に縁あり。

なんじ^{つつし}慎んで^{でんぐ}伝弘せよ』

てんだいだいし
天台大師

(P41・終2行/P25・終4行)

○『^{むかし}昔は^{とも}共に^{りょうぜん}靈山にて^{おな}同じく^{ほっけ}法華を^き聴けり、^{しゆくえん}宿縁の^お逐う^{ところ}所^{いままたきた}今復來る』

《^{しゆい}思惟のひととき ②》

南岳大師 慧思 (なんがく だいし えい) が、天台大師 智顛 (ちぎ) に申し伝えた言葉
「昔は共に靈山(りょうぜん)にて同じく法華を聴(き)けり、宿縁の逐(お)う所 今復(いままた)来
(きた)る」を — あなたはどのように受け止めますか？

日本で 〈事〉 が完成

(P48・終2行/P30・4行)

ほけきょう
法華経は日本文明の基礎

(P49・終6行/P30・終3行)

聖徳太子は法華経の精神を基にして、有名な《十七条憲法》をつくられ、はじめて日本に〈国の法〉と〈人間のふみ行なうべき法〉を打ち立てられました。～ わが日本の文明の夜明けが、ほかならぬ法華経の精神によってなしとげられたという大事実を、われわれは忘れてはならないのです。

※『和』と「^{はつとく}八徳 — ^{じん}仁・^ぎ義・^{れい}礼・^ち智・^{ちゆう}忠・^{しん}信・^{こう}孝・^{てい}悌」

でんぎょう だいし さいちよう
伝教大師 最澄

(P51・4行/P31・終2行)

平安朝 仏教の^{だらく}墮落

(P55・7行/P31・終6行)

ねんぶつ
念仏の教え

(P61・6行/P38・7行)

ぜんしゅう おこ
禅宗が興る

(P67・1行/P42・1行)

にちれんしょうにん しゅっせ
日蓮聖人の出世

(P69・終4行/P43・終4行)

ほけきょう じっせん おし
法華経は実践の教え

(P70・終3行/P44・8行)

- 真の救いは法華経の教えの〈実践〉にあるということです。
- 理解から信仰へ、信仰から**実践**へ、ということです。
- 天台大師の解き明かされた〈理（理論）〉を**徹底して実践**。

しゆい
《愚惟のひととき ③》

- ①開祖さまは、《十七条憲法》制定をはじめ「わが日本の文明の夜明けが、ほかならぬ法華経の精神によってなすとげられたという大事実を、忘れてはならない」と説かれています。
- ②また「真の救いは法華経の実践にある」と説かれています。
- この開祖さまのお言葉を、あなたはどのように受け止めますか？

なむみょうほうれんげきょう
南無妙法蓮華経

(P72・1行/P45・6行)

- 「ああ、ありがたい妙法蓮華経！ わたくしはこのお経の真実の教えに全生命をお任せします！」
- 尊いのは、あくまでも法華経の教えなのです。そして、その**教えを**実践**すること**なのです。
- 〈南無妙法蓮華経〉と唱えるのは、その受持と実践との信念をいよいよ心に固く植え付けるためにするのです。

ほけきょう すく おし
法華経は 救い第一の教え

(P74・5行/P46・終3行)

- 法華経は〈人間尊重〉の教えであり、〈人間完成〉の教えであり、その上に立つ〈人類平和〉の教えです。
- 《法華経》はその内容が尊いのです。その精神が尊いのです。そして、その**教えを**実践**することが尊い**のです。

《^{しゆい}息惟のひととき ④》

《法華經》は、『〈人間尊重〉の教え、〈人間完成〉の教え、〈人類平和〉の教え』であると、開祖さまはお説きになっています。

では、その「《法華經》に帰依します！」という意味である『南無妙法蓮華經』の「お題目」を唱える時 ——

私は、「教えを実践する！」という気持ちを込めて、唱えていただろうか？
振り返ってみましょう。

(単なる“唱える言葉”として、口先だけで唱えてはいなかったか?)

むりようぎきょう 無量義經

(P77・3行/P49・4行)

- 釈尊は —— いままでの四十余年間、こういう目的で、このように法を説いてきた —— じつはまだ真実をすっかりうち明けていないのだ。しかし、今まで説いてきた教えもすべて真実であり、すべて大切なものである、なぜなら、すべての教えはただ一つの真理から出ているからである。

じよぶん しょうしゅうぶん る づうぶん 序分・正宗分・流通分

(P81・5行/P52・2行)

- 〈序分・じよぶん〉とは、そのお経は、いつ、どこで、どんな人びとを相手として、なぜお説きになったのかという大要などが書かれてある部分。正宗分の糸口。

【序論・お経の目的】

- 〈正宗分・しょうしゅうぶん〉とは、そのお経の本論。中心となる意味をもった部分。

【本論・仏の真意】

- 〈流通分・るづうぶん〉とは、正宗分に説いてあることをよく理解し、信じ、身に行えば、どんな功德があるかということをお説き、だからこれを大切に、あまねく世に広めよ、そういう努力をする者にはこんな加護があるのだよ、ということをお説かれた部分。

【功德・弘法(くほう)の心得】

しゃくもん ほんもん しゃくぶつ ほんぶつ 迹門と本門 迹仏と本仏

(P84・7行/P54・4行)

○〈**迹門の教え**〉は〈迹仏・しゃくぶつ〉の教え。〈迹仏〉とは、実際にこの世にお生まれになった釈迦牟尼世尊のことです。ですから〈迹門の教え〉は一口に言って、——宇宙の万物万象はこのようになっている、人間とはこのようなものだ、だから人間はこう生きねばならぬ、人間どうしの関係はこうあらねばならぬ——、ということをお教えされたものです。いいかえれば、**〈智慧〉の教え**です。

○〈**本門**〉では、本来仏というのは、宇宙のありとあらゆるものを生かしている宇宙の大真理〈大生命〉であるということをお明らかにされます。したがって〈本門の教え〉は——自分は宇宙の大真理である**〈本仏〉に生かされているのだ**。という大実実めにめざめよ——というもので、〈智慧〉を一步超えた素晴らしい魂の感動、本仏の〈大慈悲〉を生き生きと感じる教えです。**〈慈悲〉の教え**です。

ぶつせつかんふげんぼきつぎょうぼうきょう 仏説観普賢菩薩行法経

(P87・1行/P56・1行)

○ わたしどもが**法華経の精神を身に行うための具体的な方法**として、(釈尊は)懺悔するということをお教えされてあるのです。

○ 修行次第で自分も仏になれるのだとわかって、日常生活では悩みや苦しみ、いろいろな欲や悪念が次から次へと湧いてきます。それで、せっかく自分も仏になれるという勇気もくじけがちになります。つい迷いの黒雲に押し流されそうになるのです。その黒雲を払いのけるのが**懺悔**であり、その懺悔の方法をお教えされたのが《観普賢経》なのであります。

○『**但當に深く因果を信じ、一實の道を信じ、佛は滅したまわずと知るべし**』

(観普賢経 四二四頁 七行)

きんげ 懺悔とは

(10巻P151行/P12)

- 第一に、「**誤りを自覚する**」
- 第二に、「**それを改めることを心に誓う**」
- 第三に、「**正しい道に向かう努力をする**」

合 掌